

茨木遺跡出土建具の評価をめぐる現状と課題

清水 邦彦

1. はじめに

茨木城と言えば、シェークスピアの影響を受けた坪内逍遙の『桐一葉』で悲劇の主人公として描かれた片桐且元の居城として著名である。元和元年（1615年）の一国一城令を受け廃城となり、現在、城跡の痕跡は地上に残されていない。近年、シンポジウム「よみがえれ幻の茨木城」の開催（註1）や、茨木城を範囲に含む茨木遺跡における中近世の遺構・遺物の発見により、茨木城についての研究が進展しつつある。とりわけ、茨木遺跡から出土した建具のうち、箄欄間（図1）は建築史的にみて格式高いものと評価され、茨木城に関係するのではないかと注目されている。

さらに、「茨木城跡開改帳」を分析した馬部隆弘は廃城時の茨木城は従来の想定案（中井 2007、豊田 2007 など）よりも小規模であり、秀吉の御座所として居住空間に特化した、聚楽第の縮小版と評価する。そして、茨木遺跡で出土した箴欄間を「茨木城が秀吉の御座所であったことを裏付ける貴重な発見」と位置づける（馬部 2016）。

しかし、筆者には茨木遺跡出土建具は考古学的

検討を十分に経ないまま、その評価が一人歩きしているように感じてならない。本稿では本市でおこなった発掘調査成果の概報（茨木市教育委員会2007、以下「概報」とする。）で示した情報に基づき、建具を茨木城に伴うものとして評価した際の問題点について整理することを目的とする。

2. 茨木遺跡から出土した建具

建具は茨木市本町でおこなわれた発掘調査で検出されたSR - 1内から出土した。SR - 1は幅が広く、茨木城の東堀が想定されていた地点でもあることから、東堀の可能性が想定されている(豊田 2007)。建具の出土は流路東側斜面の二ヶ所に分かれ(図 2)、北側では上から化粧板、遣り戸、箄欄間(図 1 下)、明かり障子、短冊状板材、柱材の順に重なって出土した。一方、南側では二枚の遣り戸と一枚の板材の上に、框をはずした箄欄間(図 1 上)が載せられた状態で出土した。

これら建具のなかでも、箆欄間は残りがよく、黒坂貴裕により建築史的に検討がなされている(黒坂 2009)。図 1 下は幅 1405mm × 高さ 382mm で、

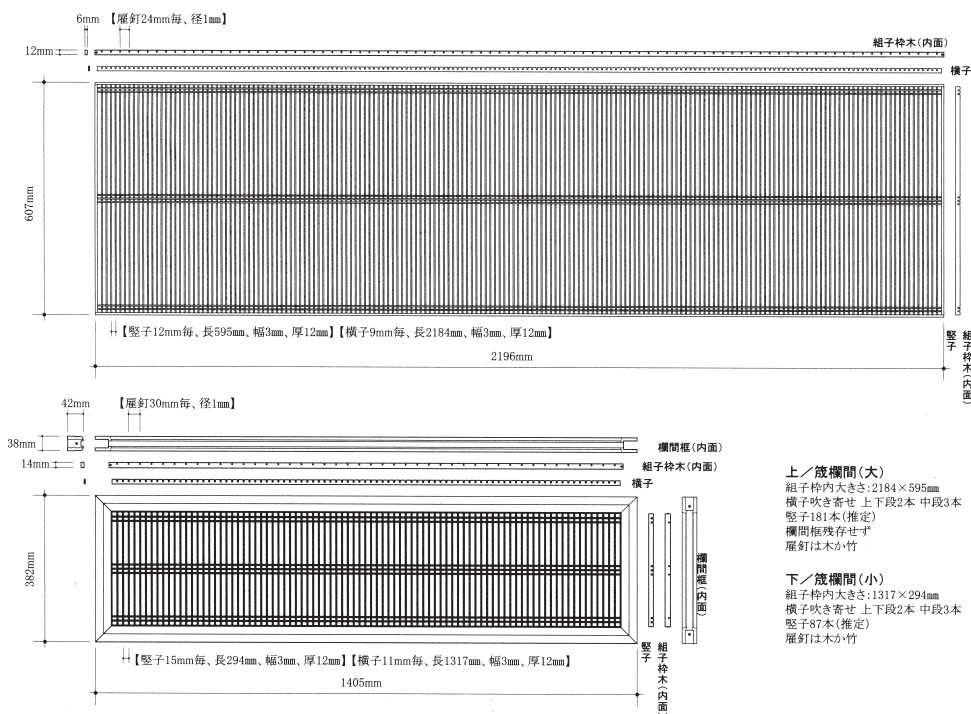


図1 茨木遺跡出土笥欄間（黒坂 2009）

その大きさと組子の細さからみて付書院などでの利用が想定されている。図 1 上は幅 2196mm × 高さ 607mm である。箴欄間は書院造り建物の上段の間などに主に用いられる。室町時代後期から江戸時代前期の現存の書院造り建物と比較した結果（註 2）、欄間の大きさの点から正傳寺本堂、幅と横子の本数では勸学院客殿、豎子の配置では圓満院宸殿との類似

が指摘されている。それぞれの建築年代は桃山時代、慶長5年（1600年）、元和5年（1619年）であることから、箄欄間（図1上）の時期をおおまかに特定でき、茨木城の御殿や周辺の寺院建築に用いられていたとみることも可能とする。

しかし、茨木城の廃城時期は元和年間であり、上記の時期比定の下限頃の建築となると、廃城後の可能性もある。箄欄間から確実に言えることは格式高い建造物に使用されたことであり、箄欄間からの時期比定に基づく議論は、茨木城との関連を考える際には難しいことを確認しておきたい。

3. SR - 1 出土遺物の検討

SR - 1（図2）から出土した遺物は建具のほかに、瓦、備前焼の播鉢や甕、唐津焼などがある。これらの帰属時期については、おおむね織豊期から江戸時代初期（17世紀前葉）とされている（黒須2011）が、ここでは概報に基づき、再検討をおこなう。

これら遺物の出土状況について、概報ではSR - 1内からの出土以上の情報を

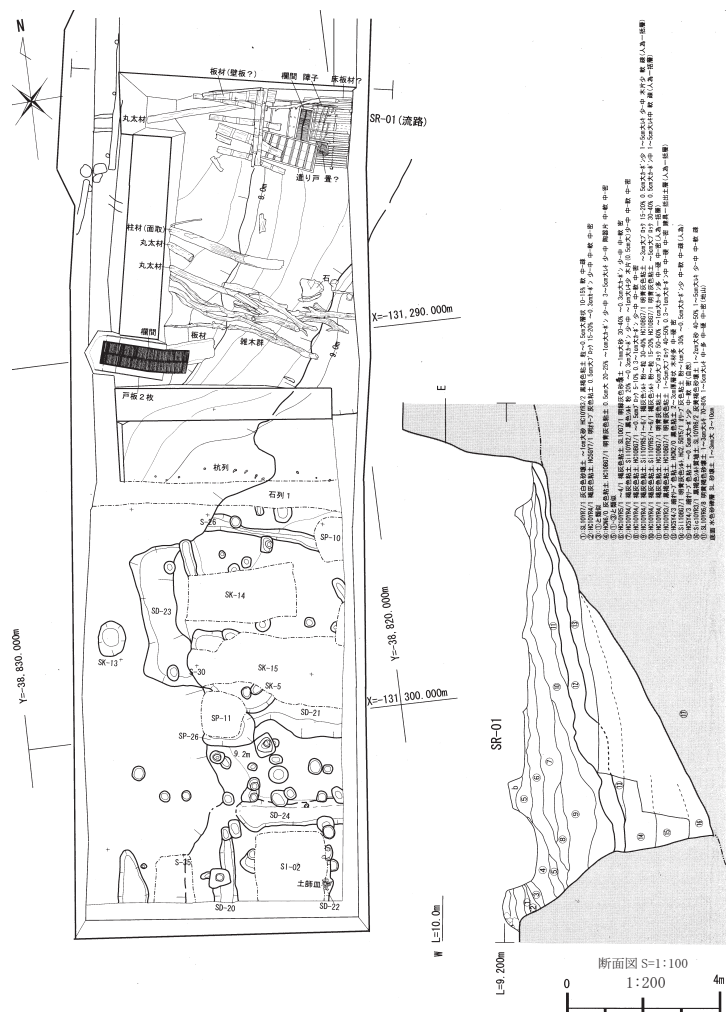


図2 茨木遺跡 建具の出土状況（茨木市教育委員会 2007）

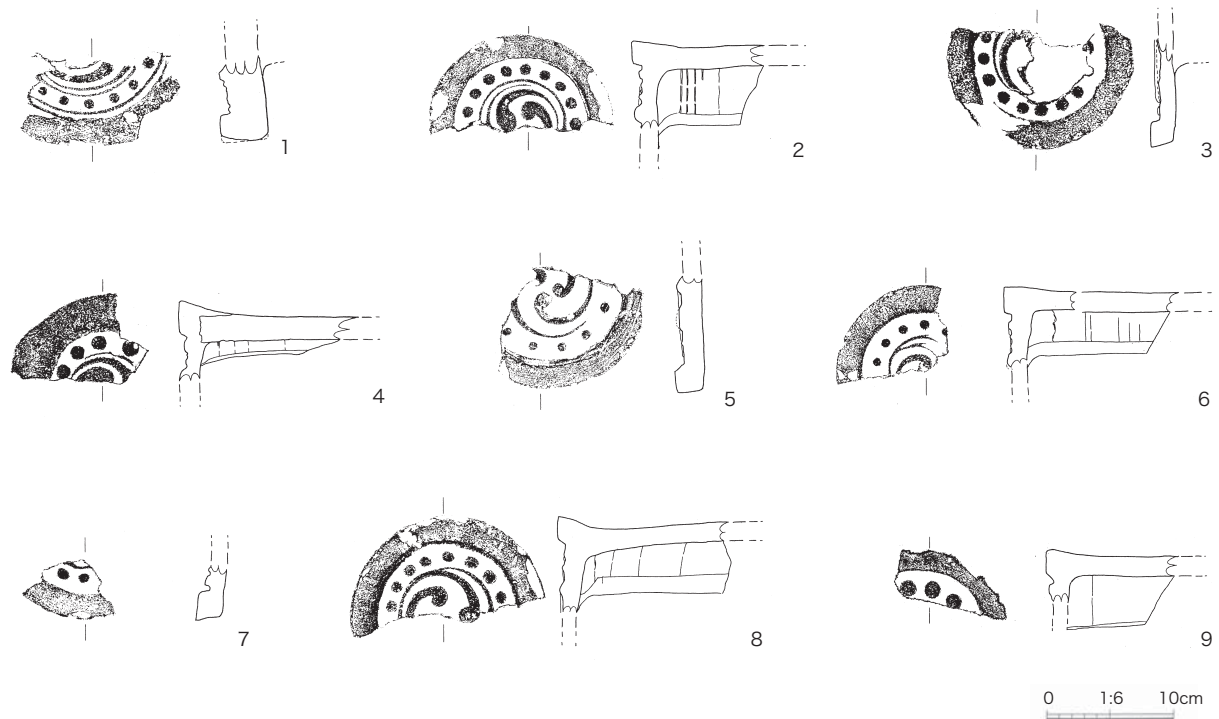


図3 茨木遺跡 SR-1 出土瓦（茨木市教育委員会 2007）

示していない。陶磁器類については破片が多く、詳細な時期を判断できない資料が多いものの、大まかには15世紀から17世紀の幅で捉えられる資料群である(註3)。一方、陶磁器とは異なり、瓦については遺存状態がよいものが多く、概報でも出土した丸瓦、平瓦、棧瓦の瓦当はすべて報告されている。とりわけ、軒丸瓦は一定数出土しており、SR-1内の出土遺物の時期を検討するうえでも適した資料群である。

SR-1から出土した軒丸瓦を図3に示した。これらのうち、図3-4のみ上層からの出土として記されている。森田克行による高槻城出土瓦の分類・編年(森田編1984)を参照し、軒丸瓦の検討をおこなうことにしたい。

図3-1は他と比べ、瓦当が分厚く、やや古相を示す資料と考えられる。他の軒丸瓦についてみていこう。コビキ痕跡を確認できる個体(図3-2・4・6・8・9)はすべて鉄線引きであるコビキBである。畿内地域では、天正年間の後半から文禄年間にかけて、コビキBへと変換していったと想定されており(森田2017)、茨木遺跡出土瓦もこれ以降のものと考えてよいだろう。巴文の頭部の形状を確認できる個体(図3-2・5・8)はいずれも頭部と尾部が明確であり、bである。bはⅢ期以降に認められる要素である。また、巴文の尾部の断面は三角形もしくは台形を呈しており、aである。これはⅣ期以前に認められる要素である。珠文径は1.0cm以下のa、1.2cm以下のbを確認できる。aはⅣ期以前に認められ、bが認められるのはⅢ期以降である。文様区径に対する内区径の割合について確認できる個体(図3-2・8)をみると、すべて65%以上のbである。bが認められるのはⅢ期以降である。

以上の検討から、SR-1から出土した軒丸瓦は森田編年のⅢ期～Ⅳ期に位置づけられる資料と評価できるだろう。Ⅱ期の瓦は高槻城の元和三年(1617年)修築時のものと位置づけられており、Ⅳ期を17世紀第2四半期頃とすること(森田2017)から、検討した軒丸瓦の実年代は元和年間以降から17世紀中頃までと考えることができる。

以上をまとめると、SR-1内出土遺物の時期は15世紀から17世紀代のなかで捉えることができる。これは遺構の存続時期を示すと考える。そ

して数多く出土した軒丸瓦は元和年間以降17世紀中頃までに位置づけられる。そのため、SR-1出土遺物をもって、建具の廃棄時期が茨木城廃城の元和年間に限定することは困難と言わざるをえない。

4. 茨木城復原案と建具出土地点

茨木城の復原を巡っては、従来は地名や絵図、地籍図等をもっておこなわれてきたが、近年冒頭でも述べた「茨木城跡開改帳」を用いた復元案も提示されている。ここでは、建具が出土したSR-1が茨木城や城下町のなかでどこに位置づけられるのかをみていきたい。

前者の代表例として、中西裕樹の復原案(図4)を紹介する(中西2015)。SR-1(図4中の発掘調査地点)の西側、東堀をはさんだ一帯は「殿町」という小字から武家屋敷が想定されている。その北が小字「本丸」から城郭中心部と考えられている。一方、SR-1の東を通過する亀岡街道沿いには、小字「魚屋町」「材木町」「米屋町」「芝屋町」「鋤屋町」があり、「文禄三年茨木村検地帳写」の町名「米屋」「魚屋」「木屋」「鋤屋」に比定される。この地区を挟んで北・南清水町、北・南中之町がそれぞれ存在するため、これらは豊臣期の城下地区と想定される。この見解を踏まえれば、建具が廃棄されたSR-1の東側には、茨木城や武家屋敷などは広がっていなかったことになる。

後者の馬部の復原案(図5)をみてみよう(馬部2016)。SR-1は東の町と二の丸の間にあった堀部分(図5のB)にあたる。この復原案でも西には城郭が広がるのに対して、東側には城下地区が広がることを確認できる。

建具一式はSR-1東側斜面から出土したことを踏まえると、建具はSR-1の東側から廃棄されたと考えることが妥当である。そして、茨木城の復原案からはSR-1の東側には城郭や武家屋敷等ではなく、城下町が広がっていたと考えられる。建具を茨木城に伴うものと評価するのならば、なぜ城郭が広がっていた西側ではなく、城下地区が広がる東側から建具が廃棄されたのかを説明する必要があるだろう。

5. もう一つの可能性 - 浄教寺 -

箴欄間はその形状から格式高い建物、茨木城の

御殿や周辺の寺院建築に用いられていたと想定されている（黒坂 2009）。しかし、前述したように、建具の出土状況は茨木城東堀と想定されるSR-

1の東側からの廃棄を示しており、その東側には城や武家屋敷等は想定されていない。そのため、茨木城以外の候補である寺院の可能性についても考慮する必要があるだろう。

ここで注目されるのは、SR-1の東側に位置する浄教寺である。浄教寺は茨木にあった五ヶ寺の中世寺院の一つで、天文15年（1546年）に創建されたと伝えられている。正徳元年（1711年）、

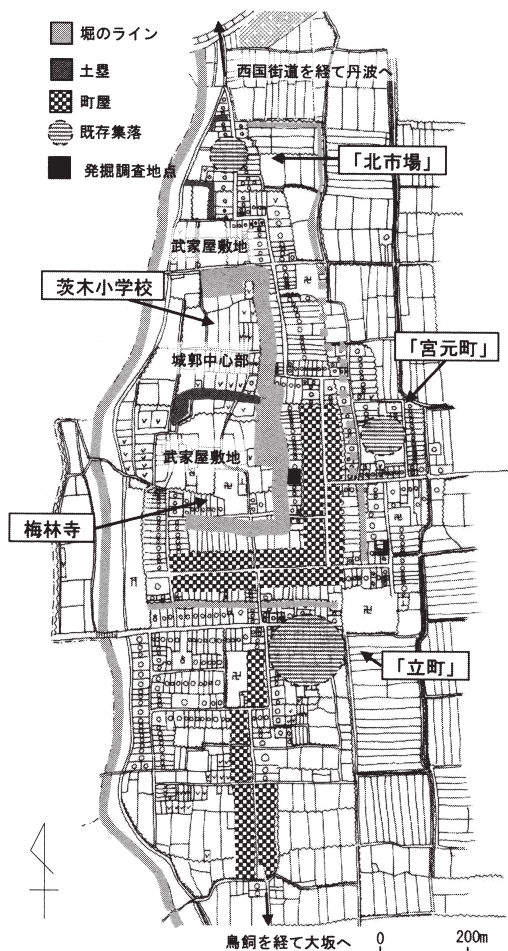


図4 中西裕樹による茨木城復原案（中西 2015）

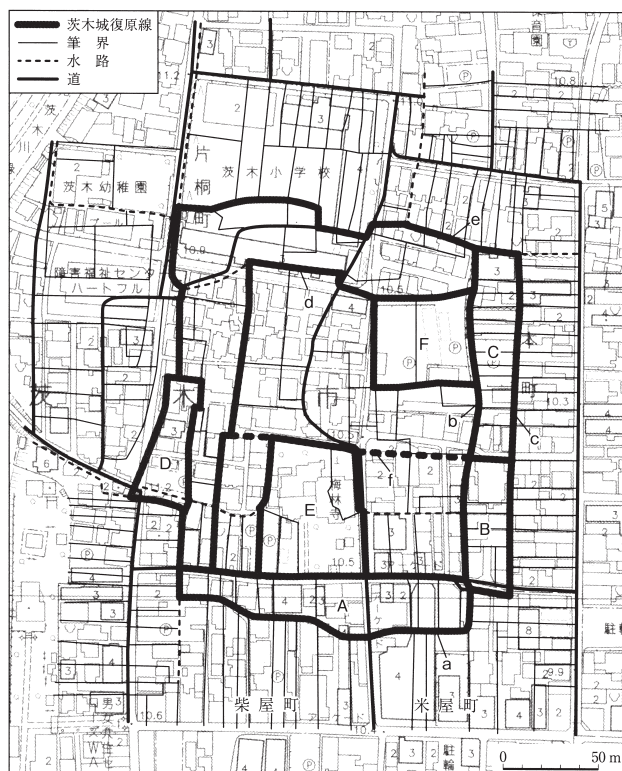


図5 馬部隆弘による茨木城復原案（馬部 2016）

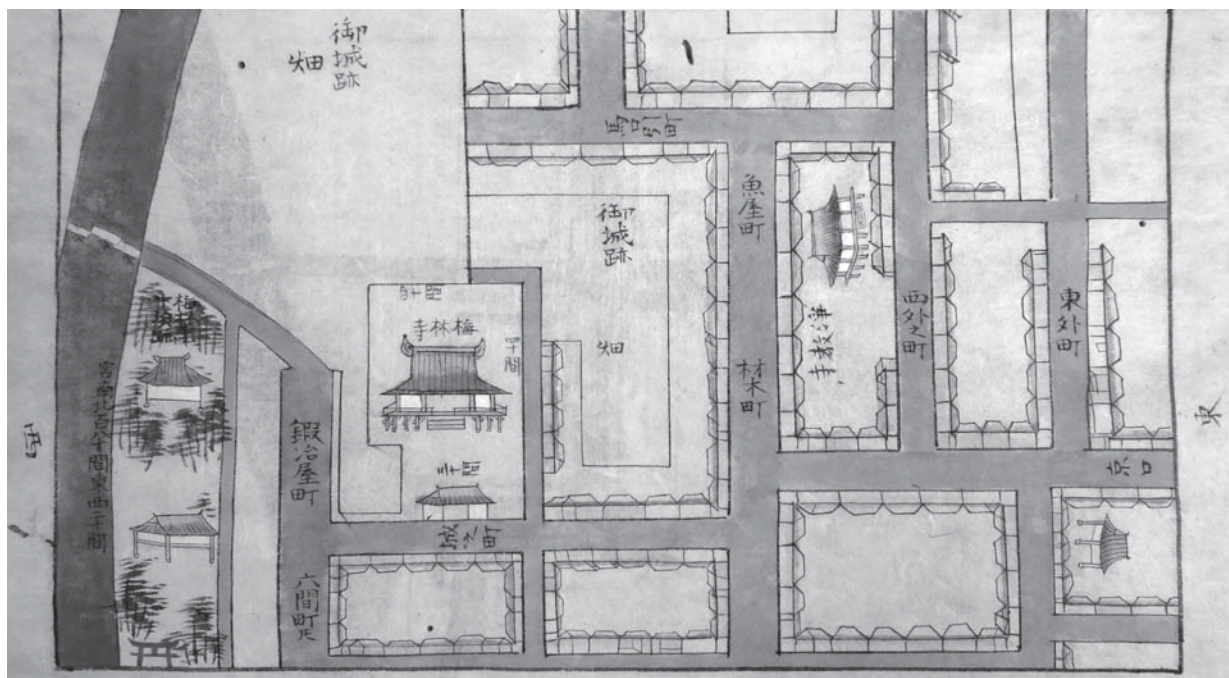


図6 摂州茨木図（竹田市立歴史資料館 2011）

火災により焼失し、享保 16 年（1731 年）に再建されたとされる（井上編 1922）。その規模については、『中川家譜』所収の「摂州茨木図」（図 6）から窺うことができる。

茨木遺跡出土建具の廃棄時期を考古学的に 17 世紀初頭に限定できないのであれば、浄教寺の焼失に伴って廃棄されたと考えることも一案である。そして、この案は想定される建具の廃棄状況とも整合的である。

6. おわりに

ここまで茨木遺跡出土建具が茨木城に伴うものと評価するにあたり、問題となる点について整理してきた。具体的には、廃棄時期の問題、廃棄地点の問題の 2 点に収斂される。今後、茨木遺跡出土建具を茨木城に伴うものと評価するならば、この 2 点の問題を解決する必要があるだろう。

この点を踏まえると、茨木遺跡出土建具の評価についてはまだ検討が求められている段階であり、茨木城に伴うものとする評価を前提に議論をする段階ではない（註 4）。

また、浄教寺の焼失に伴う廃棄を想定する場合、建具の履歴も問題となろう。しばしば、城から寺院への移築や転用の事例が認められるためである。この問題については、古文書等の調査が必要と考える。

今後、茨木遺跡の調査成果や上記課題の検討を通して、これら建具の評価を確定させていきたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、工藤心平氏、菱田哲郎氏、竹田市立歴史資料館にご協力・ご教授を賜りました。記して、感謝申し上げます。

註

1) シンポジウムの成果は下記文献に掲載されている。
中村博司編 2007『よみがえる茨木城』清文堂。

2) 当初材・後補材の区別はおこなわれていない。黒坂 2009 参照。

3) 個別の遺物の所属時期については、概報（茨木市教育委員会 2007）の遺物観察表 2 に詳しい。

4) 本稿は馬部による「茨木城跡開改帳」に基づいた茨木城の評価（馬部 2016）を否定するものではない。ただし、本稿の検討を踏まえると、茨木遺跡の建具は

現状では馬部の見解を補強するものではない。

参考文献（五十音順）

井上正雄編 1922『大阪府全誌巻之三』

茨木市教育委員会 2007『平成 18 年度発掘調査概要』

黒坂貴裕 2009「茨木城出土箆欄間について」『奈良文化財研究所紀要 2009』 pp. 10-11

黒須靖之 2011「茨木遺跡出土の建具 - 茨木城と箆欄間 -」『ヒストリア』第 228 号 大阪歴史学会 pp. 98-103

竹田市立歴史資料館 2011『豊後国岡藩主中川氏古跡図』
豊田裕章 2007「茨木城・城下町の復元案と廃城の過程」
『よみがえる茨木城』清文堂 pp. 81-113

中井均 2007「茨木城の機能と構造」『よみがえる茨木城』
清文堂 pp. 65-80

中西裕樹 2015「茨木城」『大阪府中世城館辞典』戎光祥出版 pp. 116-121

馬部隆弘 2016「織豊期の茨木」『新修茨木市史』茨木市史編さん委員会 pp. 2-55

南出眞助 1993「近世茨木町の形成過程」『追手門学院大学文学部紀要』27 pp. 105-123

森田克行編 1984『摂津高槻城』高槻市教育委員会

森田克行 2017『高槻城から日本の城を読み解く』高槻市立しろあと歴史館